

瀬良英介の一般業界向け

飼料・畜産トピックス（193）

2008年10月

（193）抗生物質を使わない小規模ブロイラー生産農場

ミネソタ大学の畜産学部と獣医薬学部にて在籍していた研究者を含む3名（J. P. Jacob, J. P. Griggs, J. B. Bender）が米国ミネソタ州内での小規模ブロイラー生産農場で抗生物質を使用していない農場の特徴を調査しました。日本でも抗生物質を使わないことに関心があるので、報告の一部を御紹介しましょう。

この調査の目的は小規模経営で抗生物質を使用しないブロイラー農場の生産管理体制の特徴を調べ、食物に由来する病原菌との接点というか係わり合いを明確にすることです。得られたデータは、このような農場に対してのバイオ・セキュリティに関する適切なエクステンション・プログラムを開発することに使われます。ミネソタ州の養鶏場で抗生物質を使わないで肉用鶏を飼養している農場には直接に農場に赴きインタビューを行ったのと電話での聞き取り調査とのどちらかです。鶏舎や管理方法についても非常に多義に渡っていることが判りました。エクステンションの観点から捉えたことからは、飼料と放牧の選択、廃棄処理、屠殺・解体・マーケティング前の飼料給餌停止です。

養鶏家がエクステンション・サービスによく問う質問の中には生産物の販路を如何にして開くかということが挙げられています。多くの養鶏家は生産に関しては実によくやっています。然し、残念なことに生産物を販売し利益を得るということは不得手のようです。つまり、量的に十分に生産し、相応の利益を得るというスキルというか術というか方法が判らないという養鶏家が多いということです。

調査結果から研究者は5点を挙げています。（1）小さい生産規模の養鶏管理方法は幅広く多義にわたっています；（2）ほとんどの小規模養鶏では飼っている鶏が野外に出られるようにしています；（3）小規模養鶏では疾病を特徴的な問題として認識していませんでした；（4）ほとんどの生産者は処理した肉用鶏をニッチ・マーケット、例えば、ファーマーズ・マーケット、直接販売、地域支援農業（コミュニティ・サポート・アグリカルチャー）、ヘルス・ストア、或いは、エスニック地域などで販売していました；（5）小規模生産者に対して適切な管理方法、バイオ・セキュリティに関しての訓練や教育が必要だという理解を生産者のみならずエクステンション側も深める必要があります。

この調査には、ローカルで委託処理を受け付けている複数の処理場から得られた抗生物質を

使わない生産者の名簿を基に20戸の農家に電話をかけ農場に出向いて行うインタビュー要請をしましたが、その中で受け付けてくれたのは12戸でした。また、ミネソタ州農務部が公表しているブロイラー生産者の名簿から44戸を選び、電話のみのインタビューとして電話をかけました。現場でのインタビューに基づいてはいますが、短くしたバージョンに仕立てた質問インタビューに前向きに応じてくれたのが32戸（73%）でした。

肉用鶏群の大きさは、電話インタビューのみの生産者の年間当り出荷羽数は20羽から2万羽でしたが、平均が2048羽で中央値が830羽でした。現場に赴いてインタビューした12戸についての年間当り出荷羽数は100羽から350羽でしたが、平均が189羽で中央値が200羽でした。

一生産期間に対して、それぞれの生産者は一孵化場からのみしか雛を購入していませんでした。全体の42戸（32戸+12戸）の生産者が使った孵化場の数は13ヶ所でしたが、30戸（71.4%）の生産者はアイオワ州にある4ヶ所の孵化場の一ヶ所からのみしか雛を買い入れていませんでした。

鶏種は大部分がコーニッシュ系クロスでした。つまり44戸の中の40戸（90.9%）がコーニッシュ系クロスということです。残りの4戸は、ブラック・オーストラロウブ種（Black Australorps）が2戸、ホワイト・ロック種が1戸、レッド・ブロイラー種が1戸でした。ブラック・オーストラロウブ種というのはオーストラリアで開発された産卵鶏ですが、米国では中西部の一部のエスニック・グループから肉用鶏として好まれています。理由は、羽が黒く、もも肉（すね肉）が色の濃いダーク・ミートだからです。

レッド・ブロイラーも肉用鶏ですが、皮が濃い色をしているからで、通常は8週間で1.4キロから1.8キロになりますが、コーニッシュ系クロスよりやや小さいです。ホワイト・ロック種は卵肉兼用種ですが、通常は12週から14週で2.5キロから2.7キロになります。

雛は主に三つの方法で調達していました。米国郵政省の郵便・小包配達を利用して孵化場から雛を送ってもらっていたのは44戸中23戸でした。約半数の農家は孵化場に直接に取りに行っていました。農家に雛を孵化場から直接に届けてもらっていたのは14戸でした。農家によっては、いくつかの方法を組み合わせているのもいましたし、農協に配送してもらった雛を取りに行っているケースもありました。

バイオ・セキュリティに関しては現場に調査に赴いた農家の中では対策を講じている農場は一軒もありませんでした。例えば、鼠や野鳥、他の動物などが鶏と接触することを防ぐ対策などを講じていた農家は1戸も無かったということです。44戸中、28戸の農家は他の鶏種も飼っ

ていましたが、それらの鶏種に抗生物質が使われていたかどうかは定かではありません。現場インタビューを行った12戸の農場中2戸の一戸は猫を飼っており、もう一戸はハムスターやインコを飼っていました。これら猫やハムスターやインコは鶏と接触することはありませんが、それらに触っている人が鶏の世話をしています。現場インタビューを行った12戸中の8戸は、農場にいるか飼っている他の動物・家禽の疾病に抗生物質を使ったことがあることを指摘しています。使われた抗生物質には、ペニシリン、オキシテトラサイクリン、クロールテトラサイクリン、シプロフロキサシン、タイロシン、エンロフロキサシン、ミクロチル、ゲンタマイシンなどがありました。

養鶏生産者12戸中の10戸は野生の動物やペットが肉用鶏と直接・間接に接する機会があることを指摘しています。それらの中には猫、犬、鼠、アライグマ、スカンク、リス、七面鳥、野鳥などが含まれます。野鳥は糞の中にキャンピロバクターやサルモネラが出ますし、鼠などはサルモネラ、それもサルモネラ・エントリティディスが絶えず出ること知られていますのでバイオ・セキュリティに関する教育は重要です。

この報告は図2点、表3点からなる9ページの論文ですが、更に詳細に関心のある方は米国家禽学会が出している2008 J. Appl. Poult. Res. 17:412-420を参照なさることをお勧めします。

余談ですが、最近の北米の学会論文の発表傾向としてエコロジーを考慮したり、抗生物質を使用しない小規模農場、或いは、オーガニック農場などについて調査したり研究する研究者が増えているように思います。その反面、そのような経営が持つ内因的で流動的な難しさも明らかになってきています。日本でも関心の深い分野ですので、米国がそうであるように日本でも大規模養鶏場やインテグレーション経営の面からも一考に価する側面を持っていると思います。野鳥の糞にキャンピロバクターやサルモネラが出ること、或いは、鼠の糞からサルモネラ・エントリティディスが絶えず出ていることなどは、日本でも経営の大小に関係なく、或いは、経営哲学の如何にかかわらず今後重要性が増すのでしよう（瀬良、2008）。